

高宮廃寺

——寝屋川市大字高宮——

発掘調査概要報告IV

1983・3

寝屋川市教育委員会

高宮廃寺

——寝屋川市大字高宮——

発掘調査概要報告IV

1983・3

寝屋川市教育委員会

序 文

昭和54年12月より、順次実施してまいりました高宮廃寺跡の発掘調査は、今年度で4年目を迎えました。今回の調査は、昭和55年5月13日に史跡指定を受けました高宮廃寺跡の西側で、市道高宮・小路線の南側の調査を行いました。その結果、古代の造成工事の跡、柱穴他多くの遺物、遺構を発見する等の考古学的成果を得ることが出来ました。今後の調査によって、古代豪族の住居跡史跡の全貌が明らかになると存じます。

調査の実施にあたり、ご協力、ご援助いただきました土地所有者の方々はじめ、地元の協力者及びご指導いただきました大阪府教育委員会ならびに関係各位には心よりお礼を申し上げますと共に、直接調査に従事していただきました各氏に対しましても深く感謝の意を表する次第であります。

昭和58年3月

寝屋川市教育委員会

教育長 坂 中 僕

例　　言

1. 本書は、寝屋川市教育委員会が昭和57年度国庫補助（総額4,000,000円、補助率—国50%、府25%）を得て実施した。大阪府寝屋川市大字高宮所在の史跡高宮廃寺跡周辺発掘調査の調査概要報告書IVである。
2. 調査は、昭和57年9月1日に着手し、昭和58年3月31日に完了した。
3. 発掘調査は、瀬川芳則同志社大学講師を調査顧問とし、塩山則之（教育委員会社会教育課）を担当者とし、補助員として増崎勝敏・奥田達治があたった。
4. 本書の作成については、塩山が執筆、実測・トレースは塩山・松田祥子・増崎平野敦子が、写真撮影は塩山がそれぞれ担当した。
5. 発掘調査の進行・報告書の作成などについては、大阪府教育委員会文化財保護課、寝屋川市文化財保護審議会寺前治一氏、四條畷市教育委員会野島稔氏、財団法人枚方市文化財研究調査会の各氏の指導助言を得たとともに、調査に際して心よく大切な土地を提供していただいた土地所有者の東森幸太郎・川口留太郎の各氏、また地元高宮自治会、大社御祖神社氏子をはじめ多くの人々の協力を得た。記して厚く感謝の意を表します。

目 次

序 文	
例 言	
I 位 置 と 環 境	1
II 調 査 に 至 る 経 過	3
III 調 査 の 概 要	5
IV 遺 物	8
遺 物 観 察 表	11
V ま と め	18
図 版	

図 版 目 次

図版 1	高宮廃寺周辺遺跡分布図	23
図版 2	調査地位置図	24
図版 3	遺構平面図	25
図版 4	トレンチ断面図	26
図版 5	トレンチ断面図	27
図版 6	出土遺物実測図（土器）	28
図版 7	出土遺物実測図（土器）	29
図版 8	出土遺物実測図（石器）	30
図版 9	出土遺物実測図（石器）	31
図版10	調査地近景	32
図版11	第1トレンチ	33
図版12	第2トレンチ	34
図版13	第3トレンチ	35
図版14	第4トレンチ	36
図版15	第5トレンチ	37
図版16	第6トレンチ・第7トレンチ	38
図版17	第2トレンチ・第5トレンチ断面写真	39
図版18	出土遺物写真（土器）	40
図版19	出土遺物写真（土器）	41
図版20	出土遺物写真（石器）	42
図版21	出土遺物写真（石器）	43
図版22	出土遺物写真（縄文式土器）	44

I. 位置と環境

高宮廃寺跡は、大阪府寝屋川市大字高宮に所在している。当廃寺跡は、生駒山系の西側斜面から派生する洪積層の寝屋川市東部丘陵南端の海拔28m前後の丘陵地形を利用した位置に立地している。

今回の調査地は、高宮廃寺跡の西南側隣接地を第4次調査として実施した。

当廃寺跡及び周辺の調査は、過去に数回実施され、その都度重要な遺物・遺構が発見されている。

特に、昭和54年度に寝屋川市教育委員会が実施した高宮廃寺範囲確認調査（第1次調査）では、廃寺の主要建物の規模と位置関係を明らかにし、その結果昭和55年5月13日付をもって国の史跡の指定を受けるに至った。

生駒山系の西側斜面の台地は、北は京都府八幡市の八幡丘陵から南は四條畷市の南野丘陵までの淀川左岸に広がる広大な丘陵及び段丘によって形成され、当廃寺のある寝屋川市東部丘陵地域はその中心部に位置している。

旧石器時代には、ナイフ形石器・小型舟底形石器・石核が出土した枚方市津田三ツ池遺跡、細石器・細石核が出土した同藤阪宮山遺跡、國府期のナイフ形石器・石核が出土した交野市神宮寺遺跡、ウルム期のナイフ形石器が採集されている太秦遺跡、ナイフ形石器・細石器等を出土した四條畷市更良岡山遺跡、有舌尖頭器を出土した同南山下遺跡などの遺跡があり、他に打上、四條畷市忍ヶ岡古墳附近においてもナイフ形石器が表面採集されており、生駒西麓に旧石器時代の遺跡が数多く点在している。

縄文時代になると、早期の神宮寺式土器として有名な交野市神宮寺遺跡、枚方市穂谷遺跡があり、中期になると交野市星田旭遺跡、四條畷市南山下遺跡、後期晩期の小路遺跡、四條畷市更良岡山遺跡が知られている。高宮廃寺跡を含む高宮遺跡においても縄文時代の土器や石鎌・石錐・石小刀が出土している。

弥生時代には、中期初頭（畿内第II様式）に出現する高地性集落として注目されている太秦遺跡や後期以降の小路遺跡がある。

古墳時代には、太秦の丘陵上にトノ山（高塚）古墳、太秦1号墳、廻シ塚古墳を

含む古墳時代後期の太秦古墳群、無袖型の横穴式石室をもつ円墳の寝屋古墳、江戸時代『河内名所図会』に「八十塚（やそつか）」として紹介された打上古墳群、横口式石槨を有し国の史跡に指定されている古墳時代終末期のものとして著名な石の宝殿古墳などがある。交野市妙見山古墳の粘土槨内からは硬玉製勾玉・ガラス製小玉等が出土しており、全長約80mの前方後円墳で長さ約6.3m、幅約1m堅穴式石室を有する四條畷市忍ケ岡古墳や蓋形埴輪のはか多数の埴輪を出土し、5世紀後半に出現する更良岡山古墳群、5世紀後半の多量の製塙土器を出土した四條畷市中野遺跡、石敷製塙炉や方形周溝状の周溝内から小型の古代馬が四体分出土した同奈良井遺跡などが周辺に分布している。

当廃寺西側に隣接する高宮遺跡の発掘調査に際しては、一辺約1メートルの巨大な掘り肩をもつ掘立柱建物跡や堅穴式住居、そしてこの巨大な掘立柱建物跡を取り囲む柵列跡などを検出しており、飛鳥・白鳳時代にわたる集落遺跡であることを示していた。また、打上遺跡では奈良時代の集落の跡も発見されている。

古代寺院としては、太秦廃寺跡、高柳廃寺跡、四條畷市讚良寺跡、同正法寺跡、枚方市中山觀音寺跡などがある。いま高宮廃寺跡の西塔の推定地には、天萬魂命を祭神とする延喜式内社大社御祖神社が鎮座し、この神社の西約200mには、江戸時代讚良郡の一の宮とされ天萬魂命の子神の天剛風命を祭神とする延喜式内社高宮神社が鎮座しているなど、注目すべきいくつもの遺跡や古社の分布がみられる。

II. 調査に至る経過

高宮廃寺跡は過去数回にわたり発掘調査が実施され、その都度重要な遺物・遺構が発見されている。特に昭和28年大阪府教育委員会によって実施された東塔跡の発掘調査により塔基壇・塔心礎・塔礎石を検出し、出土した複弁八葉蓮華文軒丸瓦・素弁八葉蓮華文軒丸瓦等から当廃寺の創建年代が白鳳時代に遡ることが判明した。また昭和54年寝屋川市教育委員会による寺域範囲確認調査では、金堂跡・講堂跡・中門跡・回廊跡のそれぞれの遺構を検出し、それぞれの建物の規模及び位置関係を明らかにすことができ、さらに創建時の素弁八葉蓮華文軒丸瓦を主要建物の各所から発見したことにより、当廃寺は短期間の間に建設されたことも判明した。出土瓦等の遺物から、当廃寺は白鳳時代に創建されたのち奈良時代末あるいは平安時代初頭に一時廃絶したのち、鎌倉・室町時代に再び延喜式内社大社御祖神社の神宮寺として旧講堂跡を利用して法灯がともされたことが確認された。

その結果、昭和55年5月13日付をもって国の史跡として指定された。

昭和55年には、高宮廃寺跡の西側隣接地で宅地開発に伴う事前の発掘調査を実施した。

その結果、縄文時代の土塙、その土塙の中から縄文式土器片・石鏸・剥片等を発見し、また一辺約1メートルの巨大な掘り肩をもつ柱穴が9カ所並ぶ2間×3間の掘立柱建物跡をはじめとする掘立柱建物跡5棟や、掘立柱建物跡を取り囲む柵列跡、竪穴式住居跡5棟分を検出した。これらはこの高宮の丘陵上に位置する縄文時代から飛鳥・白鳳時代にわたる複合遺跡であることを示しているとともに、その重要性が指摘されている。この内、一辺約1メートルの巨大な掘り肩をもつ2間×3間の掘立柱建物跡は、現在児童公園内に復原して保存されている。

現在高宮廃寺跡の西塔跡と推定されている地に延喜式内社大社御祖神社が鎮座している。

そして、当廃寺跡の西北に旧社殿伝承地があり、周辺の畠地より一段高くなっている一画があり、昭和55年度の高宮廃寺跡第2次発掘調査において、2間×3間の東西棟で、桁行5.7メートル、梁行4.2メートルの建物跡を発見した。その建物跡

の東側で、建物の長辺20メートル以上、短辺15メートル以上で、棟の示す方向はN 52° Wという掘立柱建物跡を発見した。この建物の掘り肩も、昭和55年に発見した2間×3間の建物跡の柱穴と同様に一辺が1メートル以上あるものであった。

今回、第4次調査として実施した調査地は、国史跡指定地の西で昭和55年の宅地開発に伴う発掘調査地の東、昭和56年度（第3次調査）の調査地の南に当たる地域である。

調査の目的は、高宮廃寺の西への広がりを調査するとともに、先に発見された神社遺構及びこの高宮廃寺に直接かかわった古代氏族の居住地と氏寺造営地の関連を考古学的に解明することを目的として今回の調査を実施した。

III. 調査の概要

今回の調査は、史跡「高宮廃寺跡」の西南に隣接する寝屋川市大字高宮 318・319 番地の畠地について、高宮廃寺の西へのひろがりと、氏寺・氏神に直接かかわっていた古代氏族の居住地と氏寺造営地との関連を調査することを目的として実施した。

調査は、各畠地ごとにそれぞれ東西・南北方向に幅 1.5 メートルのトレンチを設定して実施した。

318 畠地には、東西方向に 2 箇所のトレンチ（第 1 トレンチ・第 7 トレンチ）、南北方向に 2 箇所のトレンチ（東から第 2 トレンチ・第 3 トレンチ）を設定した。

319 畠地には、東西方向に 1 箇所のトレンチ（第 4 トレンチ）、南北方向に 2 箇所のトレンチ（東から第 5 トレンチ・第 6 トレンチ）を設定した。

調査地は、北から南へと傾斜しており、約 80cm の比高差が認められる。さらに、調査地に北接する市道高宮小路線からの比高差は約 1.5 m 認められる。

第 1 トレンチ（高宮 318 畠地）

318 畠地の畠地の中央に東西方向に設定した東西 27m × 南北 1.5 m のトレンチである。

遺構としては、トレンチ西端から 6 m の地点で縄文式土器及び石鐵・石匙・剥片等を出土する土塙を検出した。

土塙の深さは約 60cm で、範囲については不明である。

第 1 トレンチ西端で検出した地山を東へ掘り進むと、この土塙の所でさらに東側へかなりの角度をもって深く落ち込む様相を呈していた。

トレンチの中央部において小柱穴群を検出し、第 2 トレンチとの接点西側で一辺約 70cm、深さ約 40cm の大柱穴を 2 箇所検出した。この大柱穴は昭和 55 年検出した掘立柱建物跡に伴う櫛列の延長線上に位置している。

第2トレンチ（高宮318番地）

第1トレンチの東端から西9mのところの南側に接して南北方向に、東西1.5m×南北8mで設定したトレンチである。

断面観察から約20cmの耕土の下は、2m以上の整地面であり、数回の版築によって形成された層に別れている。層位は、西から東へと傾斜している。

整地された時期は、その出土遺物から2時期に大別される。

1時期は、高宮廃寺が造営される以前で、高宮廃寺を造営したと考えられる古代氏族が居住地としてこの丘に住居を建てた時期で、もう1時期は高宮廃寺が造営された時期であると考えられる。

第3トレンチ（高宮318番地）

第1トレンチの西端から東5mのところの南側に接して南北方向に東西1.5m×南北8mで設定したトレンチである。

遺構としては、第1トレンチとの接点付近で第1トレンチで検出している縄文土塙の一部を検出したけれども、遺構内からは遺物は何も出土していない。

約20cmの耕土を掘り下げるとすぐに地山となっており、北端と南端は約40cmの比高差が認められた。

遺物は、耕土の中から少数の須恵器片・土師器片等を出土したにすぎない。

第4トレンチ（高宮319番地）

319番地の畠地の中央に東西方向に設定した東西19m×南北1.5mのトレンチである。

このトレンチの地山は、西側から平坦に東側へ進みトレンチの西端から約11mのところから東へ深く落ち込む様相を呈している。

その落ち込みの断面観察から、このトレンチの東側も第2トレンチと同様の整地された面であることを示している。

第5トレンチ（高宮319番地）

第4トレンチの東端から西2mのところに南北方向に東西1.5m×南北7mで第2トレンチを南へ延長した線上に設定したトレンチである。このトレンチも先の第2トレンチと同様にその断面観察から、2m以上の数回にわたる版築による整地が行われていることを示し、その出土遺物からも第2トレンチと同じような様相を示している。

第6トレンチ（高宮319番地）

第4トレンチの西端から東3mのところに南北方向に東西1.5m×南北7mで第3トレンチを南へ延長した線上に設定したトレンチである。
約10cmの耕土の下はすぐに地山となっており、耕土の中から少數の須恵器片・土師器片が出土している。このトレンチはほぼ平坦で、北端と南端は約25cmの比高差が認められる。

第7トレンチ（高宮318番地）

第1トレンチの西端から東7m、北へ3mのところに東西3m×南北2mで設定したトレンチである。

このトレンチは、第1トレンチで検出した縄文土塙の北への広がりを調査するために設定したトレンチである。

約10cmの耕土の下はすぐに地山となっており、このトレンチの南西隅で縄文式土器及び石鏃を出土する掘り込み状遺構を検出した。

さらに、北東の隅においても石鏃を出土する掘り込み状遺構を検出している。

IV. 遺 物

今回の調査地からの出土遺物は、縄文式土器・須恵器・土師器・埴輪・瓦器・土釜・ナイフ形石器・石鐵・石錐・剥片・石匙・磁石等がある。縄文式土器・埴輪・瓦器・土釜について、小破片であるために器形の復原は困難である。

土 器

蓋杯（杯）（図版 6・7・18・19-1～6・8・9・12）

(1) はたちあがりは内傾してのび、端部は丸くとじ、受部は上外方にのび端部は丸くとじている。

(2～6) は、平坦な平底に高台をもつもので、底部からやや内彎気味にのびるもの (3・4・6) と、外上方にまっすぐのびるもの (2・5) とに区別される。

(8・9・12) は、底部に高台のつかないもので、平底のもの (8・12) と丸底 (9) とに分けられる。

短頸蓋（図版 6・18-7）

口頸部は、短かくほぼ直立し、端部は丸い。体部は、やや丸く、ゆるやかに外下方に張り出していく。

蓋杯（蓋）（図版 7・19-10・11）

(10) は、天井中央部は、内方へ窪み、口縁端部は内彎している。

(11) は、天井部中央部に擬宝珠様つまみを有し、内面には、口縁端部附近に比較的高いかえりを有するが、口縁端部を結ぶ線から下方へは張り出さない。

平瓶（図版 7・19-13）

口頸部のみの出土である。口縁部は上外方にのびて、端部で丸くとじている。

高杯（図版9・19-18）

柱状部は中実で、形状はゆるやかに「八」の字状に開き、根部で急に開いている。

内部にしばり目を有している。

土師器椀（図版7・19-14・15）

口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸くとじている。体部は、丸底からゆるやかにのびて口縁部に続くもの（14）、と平坦な平底から丸くゆるやかに口縁部に続くもの（15）とがある。

土師器皿（図版7・19-16）

口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は丸くとじている。体部は、平坦な平底から丸くゆるやかに口縁部に続く。

土師器鉢（図版7・19-17）

口縁部は内彎気味に立ち上がり、端部は垂直に近い立ち上がりを呈し平たくとじている。平底の底部中央は、内方へ窪み、体部はゆるやかに口縁部へ続く。

石 器

ナイフ形石器（図版8-1、20-1）

石材はサヌカイトで、素材は翼状剥片を利用したものである。

石鎌（図版8・9-2～30、図版20-1・2）

29点出土しており、石材はチャート（2）とサヌカイト（3～30）である。

凹基無茎式のもの（2～19・21・23・30）と、平基無茎式のもの（20・22）と、欠損により形状の不明なもの（25～29）が出土している。

石錐（図版9-31～35、図版21-1）

5点出土しており、石材はすべてサヌカイトである。

最大幅が上端近くに位置し、先細りしてそのまま錐部となり、両側辺からのみ剥離加工の施されているもの（31）と、全体がすんぐりした楕円形を呈し、先端とその側辺が錐部となり、粗雑な剥離加工の施されたもの（32・33・34）全体が細身で丁寧な剥離加工が側辺から施されているもの（35）がある。

石匙（図版9-36・37、21-1）

2点出土しており、両者とも石材はサヌカイトで、三角形の体部につまみのつくものである。（36）は刃部が直線を呈し、（37）は刃部が少し外彎している。

砥石（図版21-2）

砂岩系のもので六面に使用痕が認められる。砥面は著しく凹み明瞭な使用痕を残す面とあまり凹みを残さない面とがある。

使用痕の幅は、約1cmから約4.5cmである。

遺物観察表

1. 土器

器種	蓋杯(杯)	蓋杯(杯)	蓋杯(杯)	蓋杯(杯)
図番 版号	6.18-1	6.18-2	6.18-3	6.18-4
出土 地点	第2トレンチ 暗褐色砂質土層	第2トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第2トレンチ 暗褐色砂質土層
法 量 (cm)	口 径 10.8 器 高 3.1 たちあがり高 0.2 受 部 径 9.0	口 径 10.8 器 高 4.5 高 台 径 7.0 高 台 高 0.3	口 径 15.1 器 高 3.9 高 台 径 10.6 高 台 高 0.4	口 径 15.8 器 高 4.0 高 台 径 11.4 高 台 高 0.5
形 態 の 特 徴	・たちあがりは、内傾してのび、端部はするどい。 ・受部は、上外方にのび、端部は丸い。 ・底部は、やや丸い。	・体、口縁部は、上外方にのび、端部は、丸い。 ・底部は、平ら。 ・底部端にハの字形の高台を付す。	・体、口縁部は、やや内彎気味に上外方にのび、端部は、丸い。 ・底部は、平ら。 ・底部端にハの字形の高台を付し、端部内側で接地する。	・体、口縁部は、やや内彎気味に上外方にのび、端部は、丸い。 ・底部は、平ら。 ・底部端にハの字形の高台を付し、端部内側で接地する。
手 法 の 特 徴	・マキアゲ、ミズビ キ成形。 ・底部外面、回転ヘラ削り調整。 ・他は、回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビ キ成形。 ・底部外面、回転ヘラ切り。 ・他は、回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビ キ成形。 ・底部外面端、回転ヘラ削り調整。 ・他は、回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビ キ成形。 ・回転ナデ調整。
備 考	色調 (内)青灰色 (外)灰色 胎土 やや密、小砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。	色調 青灰色 胎土 密、1mmの小砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。	色調 淡灰褐色 胎土 やや粗。0.1mm～4mmの小砂粒を含む。 焼成 不良、軟質。	色調 青灰色 胎土 密、1mmの白色砂粒を含む。 焼成 良好、堅緻。

器種	蓋 蓋 杯(杯)	蓋 杯(杯)	短 頸 壺	蓋 杯(杯)
図番 版号	6.18-5	6.18-6	6.18-7	6.18-8
出 土 地 点	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層
法 器 量 (g)	口 径 18.8 高 器 高 4.5 高 台 徑 13.4 高 台 高 0.4	口 径 15.1 器 高 4.1 高 台 徑 9.9 高 台 高 0.3	口 径 8.6 残 存 高 4.3	口 径 12.0 器 高 3.5
形 態 の 特 徴	・体、口縁部は、上外 方にのび、端部は、 丸い。 ・底部は、平ら。 ・底部端にハの字形の 高台を付す。	・体、口縁部は、上外 方にのび、端部は、 丸い。 ・底部は、平ら。 ・底部端よりやや内側 にハの字形の高台を 付す。	・口縁部は、短く、は 直立し、端部は、丸 い。 ・体部は、なだらかに 下方にのびる。	・体、口縁部は、上外 方にのび、端部は、 丸い。 ・底部は、平ら。
手 法 の 特 徴	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・回転ナデ調整。 ・(底部内面中央、一 定方向のナデ調整。)	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・底部外面、回転ヘラ 切り。 ・他は、回転ナデ調整。
備 考	色調 青灰色 胎土 密、0.1mm~ 3mmの白色砂粒 を含む。 焼成 良好、堅緻。	色調 (内) 灰褐色 内面底部に一部、 自然釉付着又は 剥落 (外) 暗灰色 胎土 やや粗、1mm~ 3mmの砂粒を含む 焼成 良好、堅緻。 ・ひずみあり。	色調 青灰色 胎土 密 焼成 良好、堅緻。	色調 淡黄褐色 胎土 粗、1mm~5mm の砂粒を多く含 む。 焼成 生焼け。

器種	蓋　杯(杯)	蓋　杯(蓋)	蓋　杯(蓋)	蓋　杯(杯)
図番 版号	6. 18-9	7. 19-10	7. 19-11	7. 19-12
出 土 地 点	第5トレント 暗褐色砂質土層	第2トレント 暗褐色砂質土層	第2トレント 暗褐色砂質土層	第5トレント 暗褐色砂質土層
法 器	口　　径 12.4 高　　3.9	口　　径 16.9 高　　1.1	口　　径 13.4 器　　高 2.2 つまみ 径 1.9 つまみ 高 1.3	口　　径 15.2 器　　高 3.9
試 験				
形 態 の 特 徴	・体、口縁部は、上外 方にのび、端部は、 丸い。 ・底部は、丸味をもつ。	・口縁部は、垂直で、 端部は、丸い。 ・天井部は、平らに近 いけれども、中央部 が窪んでいる。	・口縁部は、丸く、内傾 するかえりを有し、か えり端部は、鋭い。 ・天井部は、丸味をもつ。 ・天井中央部に擬宝珠 様つまみを付す。	・体、口縁部は、上外 方にのび、端部は、 丸い。 ・底部は、平ら。
手 法 の 特 徴	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・底部外面、ヘラ切り の後、ナデ調整。 ・他は、回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・天井部外面を、回転 ヘラ削り調整。 ・他は、回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・天井部外面を、回転 ヘラ削り調整。 ・他は、回転ナデ調整。	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・底部外面、ヘラ切り の後、ナデ調整。 ・他は、回転ナデ調整。
備 考	色調　灰白色 胎土　やや密、白色微 砂粒を含む。 焼成　生焼け。 ・口縁部にすすの付着。	色調　青灰色 胎土　密、0.1 mm～1 mmの小砂粒を含 む。 焼成　良好、堅緻。	色調　(内) 青灰色 (外) 暗灰色 胎土　やや粗、0.1 mm ～3 mmの小砂粒 を含む。 焼成　良好、堅緻。 ・ひずみあり。	色調　淡青灰色 胎土　密 焼成　良好、堅緻。

器種	平 瓶	輪	輪	皿
図番 版号	7. 19-13	7. 19-14	7. 19-15	7. 19-16
出土地点	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第4トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層
法 量 (cm)	口 径 12.4 残 存 高 6.2	口 径 11.4 器 高 3.6	口 径 18.6 器 高 5.2	口 径 23.1 器 高 1.7
形 態 の 特 徴	・口縁部は、上外方に のび、端部は、丸い。 ・頸部中央付近に一条 の沈線を施す。	・口縁部は、内唇気味 に立ちあがり、端部 は、丸くとじる。 ・体部は、丸底からゆ るやかに口縁部につ づく。	・口縁部は、内唇気味 に立ちあがり、端部 は、丸くとじる。 ・体部は、平底からゆ るやかに口縁部につ づく。	・平底の底部から、カ ーブをもって立ち上 がる。 ・口縁端部は、丸くと じる。
手 法 の 特 徴	・マキアゲ、ミズビキ 成形。 ・回転ナガ調整。	・横ナデ調整。	・横ナデ調整。	・ナデ調整。
備 考	色調 (内) 灰茶色 (外) 淡灰色 胎土 密 焼成 良好、堅緻。 ・頸部内部及び肩部に 自然釉付着。 ・残存は頸部のみ。	色調 淡赤褐色 胎土 密 焼成 良好 土師器	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良好 土師器	色調 (内) 赤褐色 (外) 淡灰褐色 胎土 密 焼成 良好 土師器

器種	鉢	高杯
図番 版号	7. 19-17	7. 19-18
出土 地点	第5トレンチ 暗褐色砂質土層	第5トレンチ 暗褐色砂質土層
法 量 [cm]	口 径 31.8 器 高 9.9	残 存 高 7.1
形 態 の 特 徴	<ul style="list-style-type: none"> 口縁部は、内輪気味に外上方にのび、端部は、垂直に近く、平たくとじる。 平底の底部中央は、内方へ窪み、体部は、ゆるやかに口縁部へつづく。 	<ul style="list-style-type: none"> やや「ハ」の字状の脚部から振部でカーブをもって広がる。 内部にしぶり目を残す。
手 法 の 特 徴	<ul style="list-style-type: none"> 横ナデ調整。 	<ul style="list-style-type: none"> 風化のため、調整不明。
備 考	色調 赤褐色 胎土 密 焼成 良好 土師器	色調 淡赤褐色 胎土 やや粗、0.1mm ~5mmの小砂粒を含む。 焼成 良好 土師器

2. 石 器

種類	図版及び 図版番号	現存長 mm	最大幅 mm	厚み mm	重さ (g)	石質	備考
ナイフ形石器	8-1	42.4	15.0	7.1	4.6	サヌカイト	素材は翼状剥片
石鎌	8-2	24.3	20.3	3.0	1.0	チャート	
石鎌	8-3	18.3	17.1	2.8	0.7	サヌカイト	
石鎌	8-4	23.5	14.5	3.2	0.8	サヌカイト	
石鎌	8-5	24.6	15.9	2.8	0.8	サヌカイト	
石鎌	8-6	18.8	13.0	3.2	0.4	サヌカイト	
石鎌	8-7	13.7	14.3	3.0	0.45	サヌカイト	
石鎌	8-8	12.0	9.6	2.8	0.2	サヌカイト	
石鎌	8-9	17.2	14.0	3.4	0.5	サヌカイト	
石鎌	8-10	13.0	19.6	2.4	0.5	サヌカイト	
石鎌	8-11	17.0	13.4	2.7	0.3	サヌカイト	
石鎌	8-12	13.3	14.1	4.0	0.6	サヌカイト	
石鎌	8-13	12.3	16.2	2.9	0.4	サヌカイト	
石鎌	8-14	20.8	14.2	5.8	1.2	サヌカイト	
石鎌	8-15	11.8	13.8	2.3	0.2	サヌカイト	
石鎌	8-16	19.3	11.3	3.2	0.8	サヌカイト	
石鎌	8-17	20.5	18.9	4.8	1.6	サヌカイト	
石鎌	8-18	22.2	18.5	3.2	1.2	サヌカイト	
石鎌	8-19	24.0	17.8	3.8	1.5	サヌカイト	
石鎌	8-20	26.9	22.0	7.3	3.0	サヌカイト	
石鎌	9-21	33.3	13.7	4.2	1.8	サヌカイト	
石鎌	9-22	24.3	25.4	5.2	3.2	サヌカイト	
石鎌	9-23	8.2	7.1	2.1	0.15	サヌカイト	
石鎌	9-24	16.5	9.8	2.7	0.4	サヌカイト	
石鎌	9-25	11.2	13.0	2.1	0.3	サヌカイト	

種類	図版及び 図版番号	現存長 [mm]	最大幅 [mm]	厚み [mm]	重量 (g)	石質	備考
石鎌	9-26	13.2	12.1	3.0	3.0	サヌカイト	
石鎌	9-27	18.9	13.0	2.25	0.5	サヌカイト	
石鎌	9-28	17.6	7.5	2.3	0.5	サヌカイト	
石鎌	9-29	16.9	9.25	2.4	0.3	サヌカイト	
石鎌	9-30	16.9	12.9	2.4	0.4	サヌカイト	
石錐	9-31	30.7	17.5	7.8	3.5	サヌカイト	錐長 14.8 mm 錐径 5.7 mm × 4.9 mm 錐部断面は菱形
石錐	9-32	24.3	11.0	6.2	1.3	サヌカイト	錐長 10.0 mm 錐径 4.4 mm × 3.1 mm 錐部断面は菱形
石錐	9-33	26.0	10.4	3.3	1.9	サヌカイト	錐長 10.2 mm 錐径 5.4 mm × 3.1 mm 錐部断面は菱形
石錐	9-34	28.1	8.4	6.0	1.2	サヌカイト	錐長 20.1 mm 錐径 3.6 mm × 3.0 mm 錐部断面は菱形
石錐	9-35	27.3	7.5	3.3	0.65	サヌカイト	錐長 19.0 mm 錐径 4.7 mm × 1.9 mm 錐部断面は菱形 頭部欠損
石匙	9-36	41.8	31.0	7.8	6.6	サヌカイト	形：横型
石匙	9-37	35.4	20.6	3.3	1.3	サヌカイト	形：横型 つまみ部欠損
不明	9-38	22.6	19.5	3.2	1.8	サヌカイト	先端部欠損

V. まとめ

今回の調査は、高宮廃寺跡の西への広がりを確認するとともに、先に発見された神社遺構及び一辺1m以上の柱穴をもつ建物跡群を中心とする高宮廃寺造営に直接かかわった古代氏族の居住地と氏寺造営地の関連を調査し、今後の保存対策を講じる必要から実施したものである。

高宮廃寺跡の主要伽藍の範囲については、昭和54年に実施した範囲確認調査によりほぼ確認されているが、築地等を含む寺域全体の規模についてはまだ未確認の部分が残されている。

昭和54年以降実施してきた発掘調査により、この高宮の丘陵上に形成されていた掘立柱建物群を中心とした古代の集落の様相が徐々に明らかになり、氏寺と氏神社を造営するために居住区域を提供した事実も判明しつつある。

今回の調査での第1トレント・東部分、第2トレント・第4トレント・東部分・第5トレントにみられる整地の跡、特に第2トレント・第5トレントに顕著にあらわれた版築された整地の跡のあり方は、古代の土木事業を考える上において問題を提起することになるであろう。そして第1トレント・第4トレントでみられた地山の東への落ち込みは、現在国の史跡指定を受けている高宮廃寺跡の主要伽藍の存在する地域と、昭和55年に検出した柵列で囲まれた巨大な柱穴をもつ掘立柱建物跡が存在する地域との間が谷あい地形であったことを示しており、さらに今回の調査での出土遺物から、古代氏族の居住地を造るために谷を埋め平坦にし、さらに高宮廃寺を造営する時期に再度整地されたことが推察される。

今回の調査においてさらに注目すべき点は、遺物の中にナイフ形石器・繩文式土器及び石鎌、そして小数ではあるけれども円筒埴輪片が出土していることである。

円筒埴輪の出土により、この高宮の丘陵上ではこれまでに古墳は発見されていないが、北隣りの丘陵上には太秦古墳群が存在しており、この丘の上でも消滅した古墳の痕跡が発見される可能性がてきた。

繩文式土器片及び石鎌・剥片等の出土については、昭和55年度の開発に伴う事前の発掘調査においても、遺構と遺物を発見しており、今回は東約100mに位置して

いる。今回の縄文時代遺物の出土により、造構のひろがりを一層確認することができた。

また、ナイフ形石器の出土は、生駒山系西麓における旧石器時代の研究に寄与するものである。

図 版

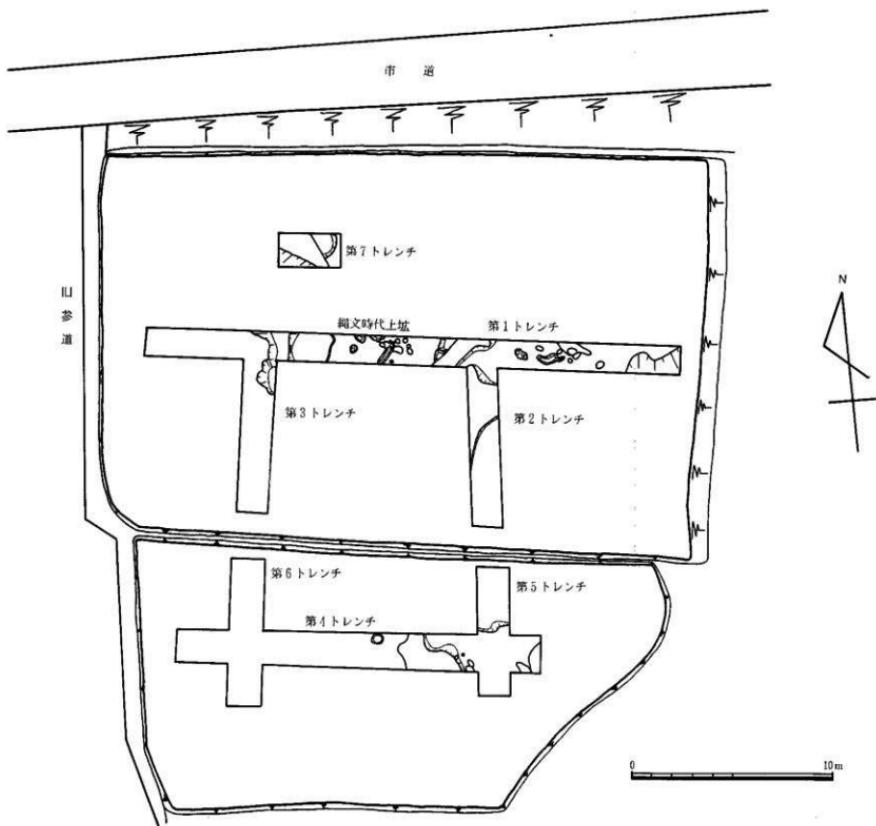
図版1 高宮廃寺周辺遺跡分布図

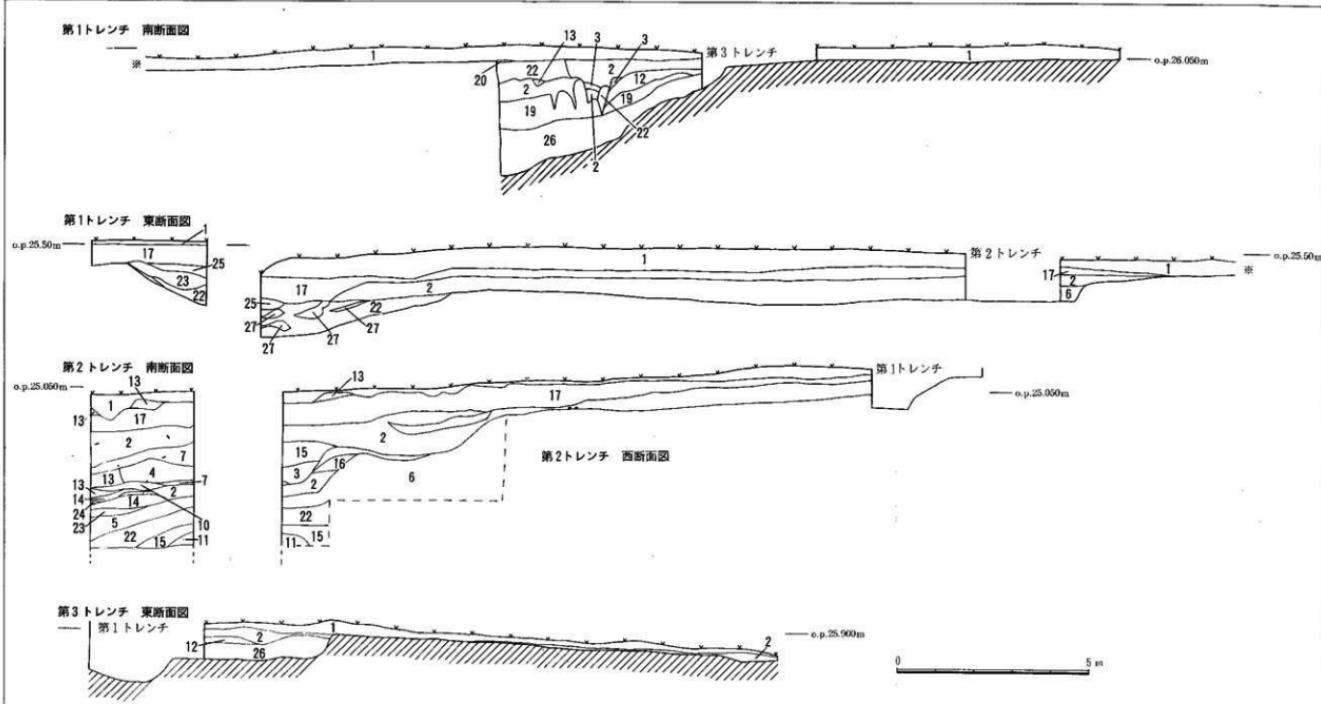


- | | | | | |
|-------------------|-------------------------|---------------------|-------------------|--------------------|
| 1. 三井南遺跡 | 2. 秦山遺跡 | 3. 秦河勝の墓 | 4. 池の瀬遺跡 | 5. 寝屋遺跡 |
| 6. 寝屋東遺跡 | 7. 延喜式社内細屋
神社 | 8. 肥シ塚古墳 | 9. 太秦北遺跡 | 10. 太秦1号墳 |
| 11. 寝屋南遺跡 | 12. 神宮寺跡 | 13. 太秦廐寺跡 | 14. 動物ハニワ
出土地 | 15. 太秦遺跡・
太秦古墳群 |
| 16. トノ山(高塚)
古墳 | 17. 寝屋古墳 | 18. 打上遺跡 | 19. 雷神石
(石棺の身) | 20. 高良(打上)神社 |
| 21. 打上神社
古墳群 | 22. 石の宝殿古墳
(史跡) | 23. 国守西遺跡 | 24. 国守遺跡 | 25. 延喜式内社
高宮神社 |
| 26. 高宮遺跡 | 27. 高宮廐寺跡
(史跡) | 28. 延喜式内社
大社御祖神社 | 29. 小路遺跡 | 30. 更良川遺跡・
講良寺跡 |
| 31. 北口遺跡 | 32. 忍ケ岡古墳・延
喜式内社忍陵神社 | 33. 更良岡山
古墳群 | 34. 坪井遺跡 | 35. 忍ケ岡駅前遺跡 |

図版2 調査地位置図







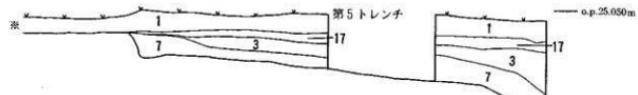
- | | | | | |
|---------------------------------|-----------------|------------------------|--------------------------|---------------------------|
| 1. 耕土 | 2. 暗褐色砂質土層 | 3. 茶褐色砂質土層 | 4. 茶褐色砂質土層 | 5. 茶褐色砂質土層 |
| 6. 茶褐色砂質土層
赤褐色粘土じまいり | 7. 暗茶褐色砂質土層 | 8. 暗茶褐色砂質土層
ぶちまじり | 9. 暗茶褐色砂質土層
赤褐色粘土じまいり | 10. 暗茶褐色砂質土層
赤褐色粘土じまいり |
| 11. 黄褐色砂質土層 | 12. 黄茶褐色砂質土層 | 13. 黄褐色砂質土層 | 14. 黄褐色砂質土層
赤褐色粘土じまいり | 15. 黄茶褐色砂質土層 |
| 16. 灰茶褐色砂質土層
黄色
赤褐色粘土じまいり | 17. 淡黄褐色砂質土層 | 18. 淡茶褐色砂質土層 | 19. 淡黄褐色砂質土層 | 20. 赤褐色砂質土層 |
| 21. 暗赤褐色砂質土層 | 22. 黑色砂質土層 | 23. 黑色砂質土層
粘土じまいり | 24. 黄色粘土 | 25. 淡褐色砂質土層 |
| 26. 黄褐色砂質土層
小れきじまいり | 27. 赤褐色粘土(ブロック) | 28. 茶褐色砂質土層
黄色ぶちまじり | 29. 黑褐色砂質土層 | |

第4トレンチ 北断面図

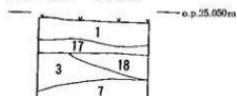
1. 耕土
2. 暗褐色砂質土層
3. 茶褐色砂質土層
4. 茶褐色砂質土層
赤褐色まじり
5. 茶褐色砂質土層
赤褐色粘土まじり
6. 茶褐色砂質土層
赤褐色粘土まじり
7. 暗褐色砂質土層
8. 暗褐色砂質土層
赤褐色まじり
9. 暗褐色砂質土層
赤褐色粘土まじり
10. 暗褐色砂質土層
赤褐色粘土まじり
11. 黄褐色砂質土層
12. 黄茶褐色砂質土層
13. 灰褐色砂質土層
14. 灰褐色砂質土層
赤褐色粘土まじり
15. 灰茶褐色砂質土層
16. 灰茶褐色砂質土層
黄褐色粘土まじり
17. 淡褐色砂質土層
18. 淡茶褐色砂質土層
19. 輕褐色砂質土層
20. 赤褐色砂質土層
21. 暗褐色砂質土層
22. 黒色砂質土層
23. 黑色砂質土層
粘土まじり
24. 黄色粘土
25. 淡褐色砂質土層
26. 黄茶褐色砂質土層
小粒混じり
27. 赤褐色粘土
(ブロック)
28. 茶褐色砂質土層
黄褐色まじり
29. 黑褐色砂質土層



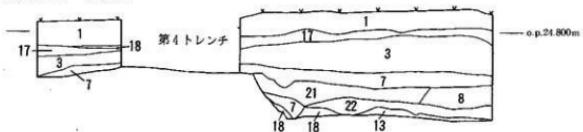
第5トレンチ



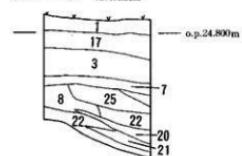
第4トレンチ 東断面図



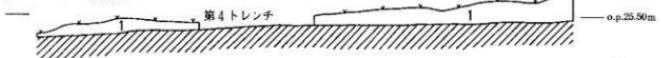
第5トレンチ 西断面図



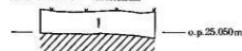
第5トレンチ 北断面図



第6トレンチ 東断面図



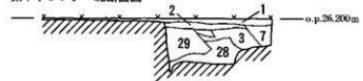
第6トレンチ 北断面図



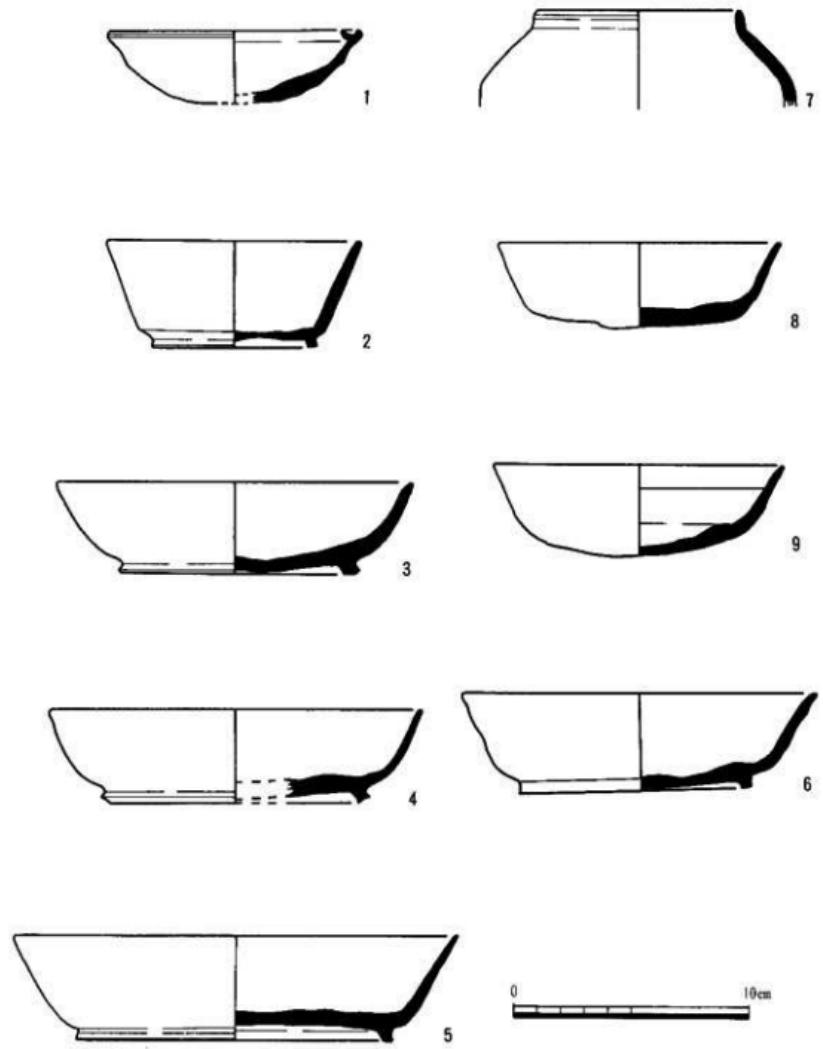
第7トレンチ 東断面図

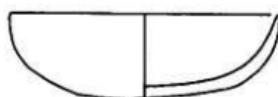
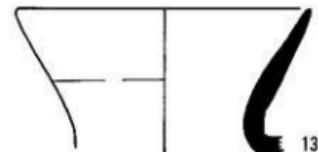
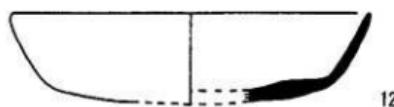
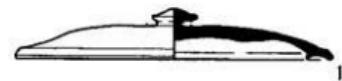
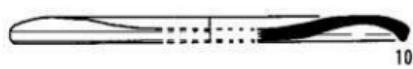


第7トレンチ 北断面図

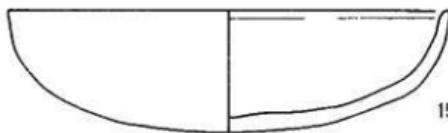


0 5m

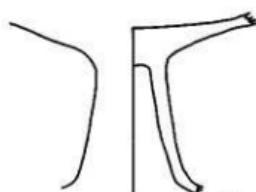




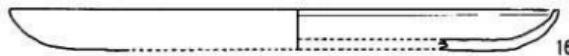
14



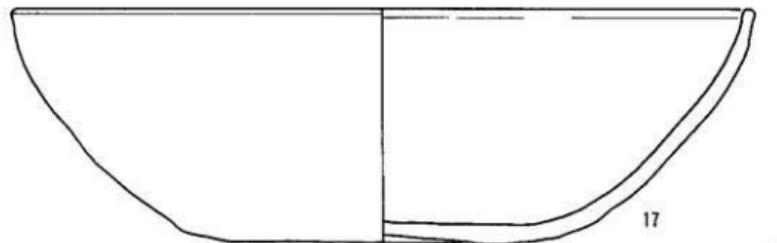
15



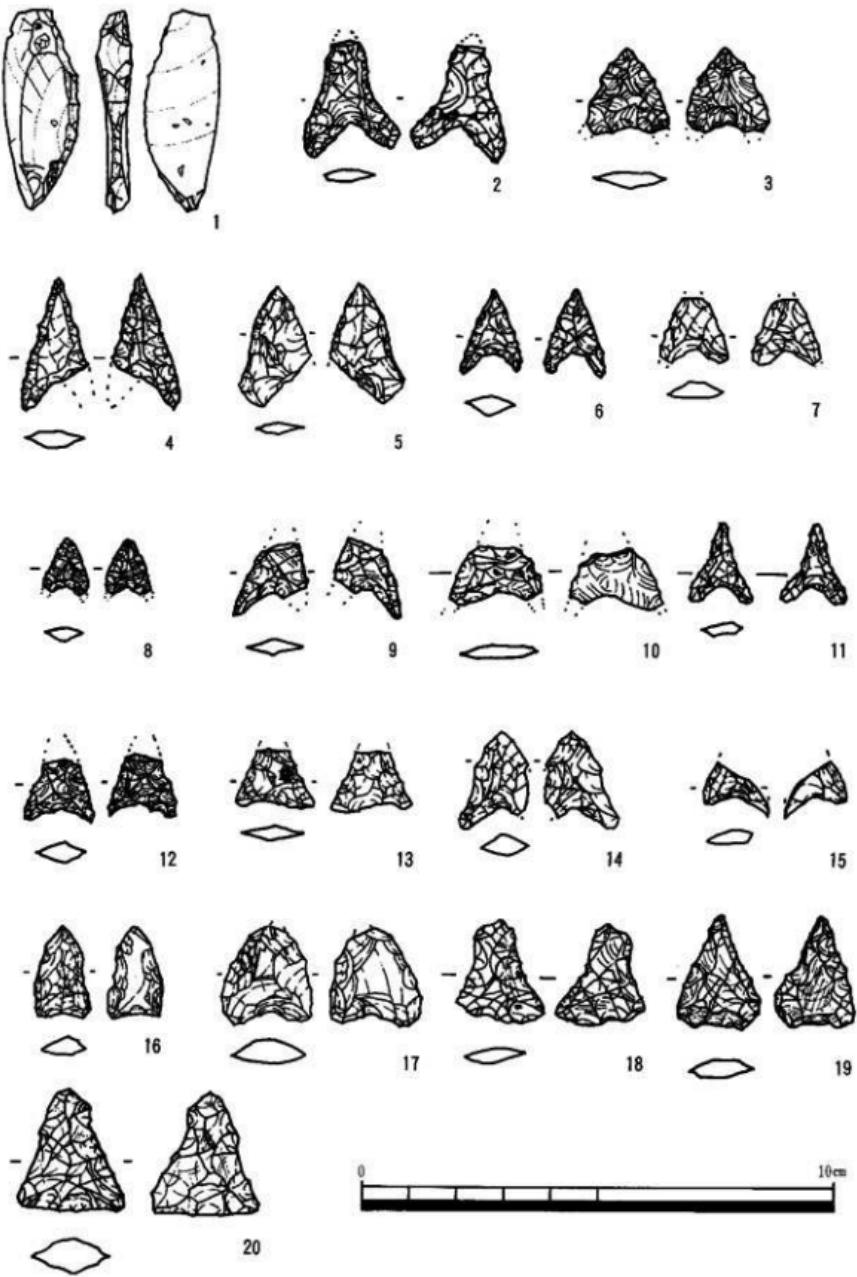
16



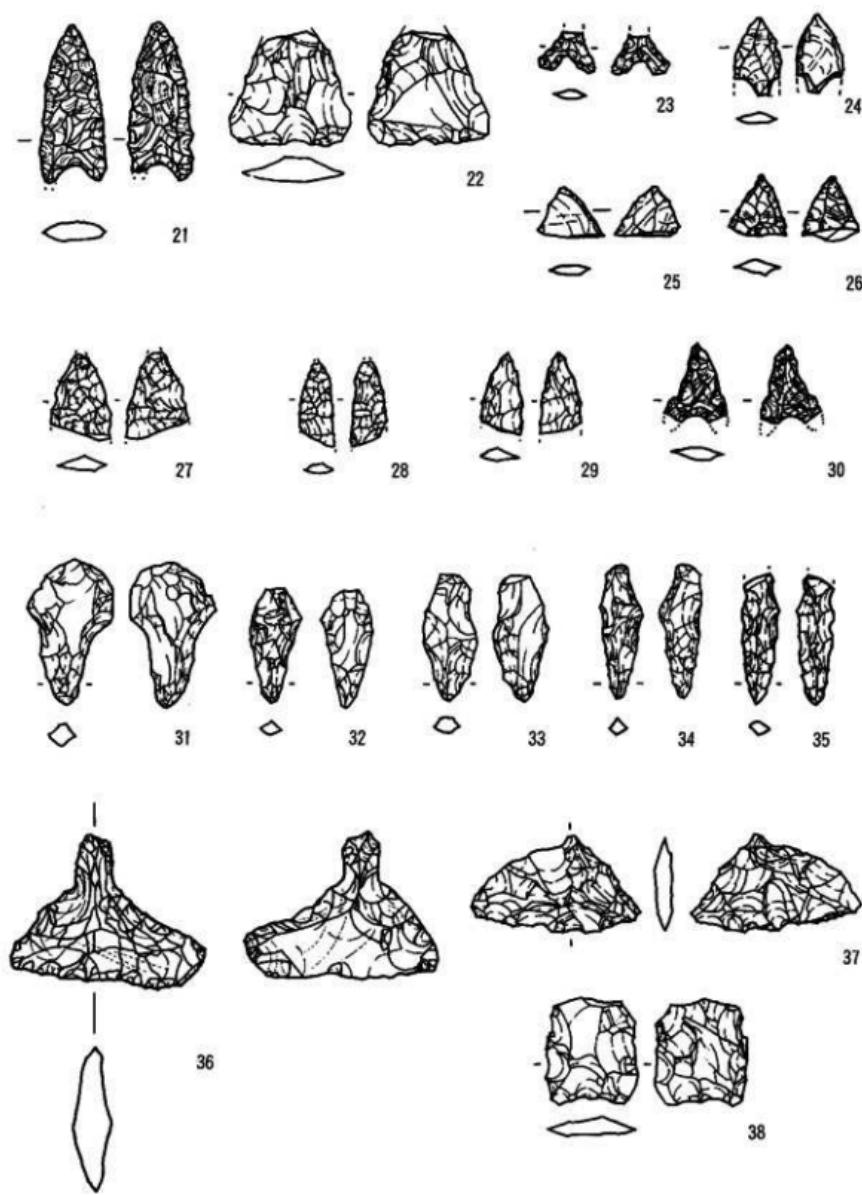
17



0 10cm



図版9 出土遺物実測図・石器



0 10cm



北西より(後方の竹藪史跡高宮庵寺跡)



南西より(後方の竹藪史跡高宮庵寺跡)

図版11 第1トレンチ



西より



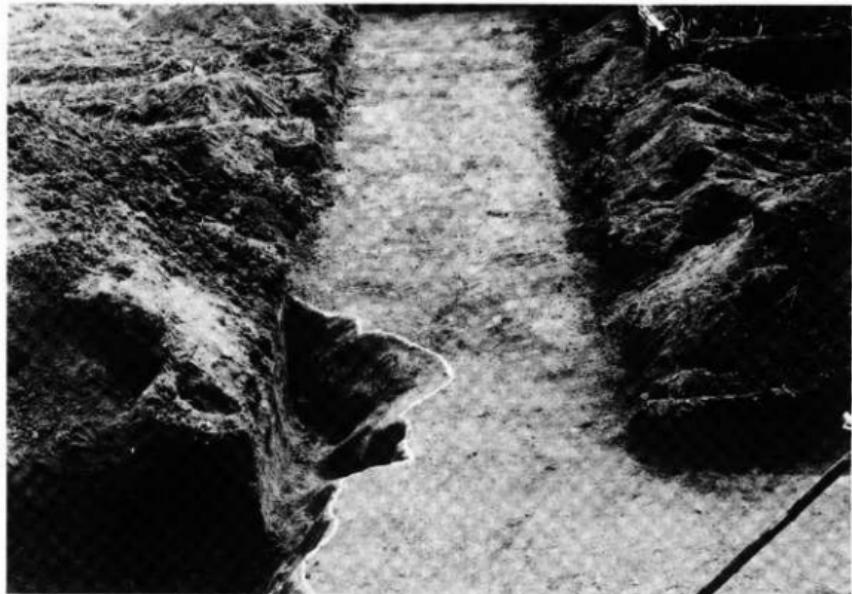
ピット群・東より



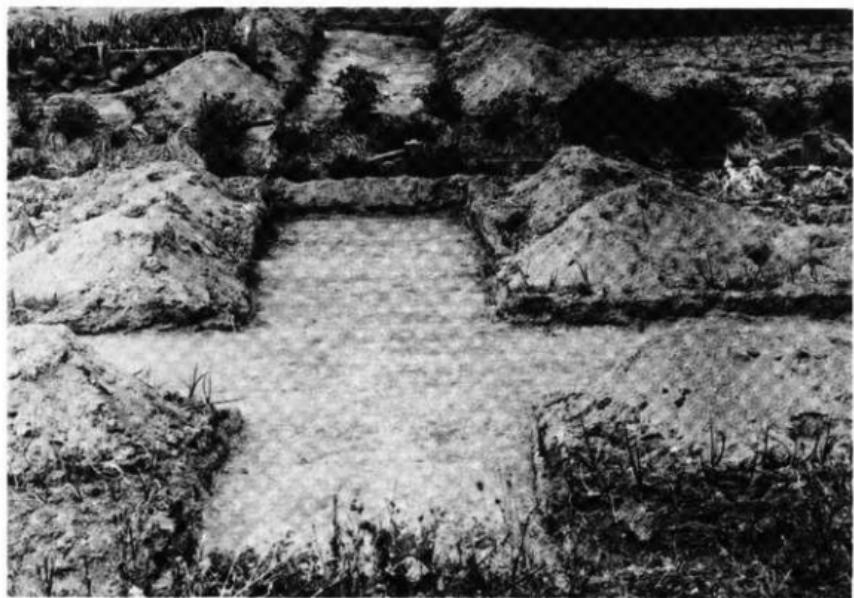
北より



南より



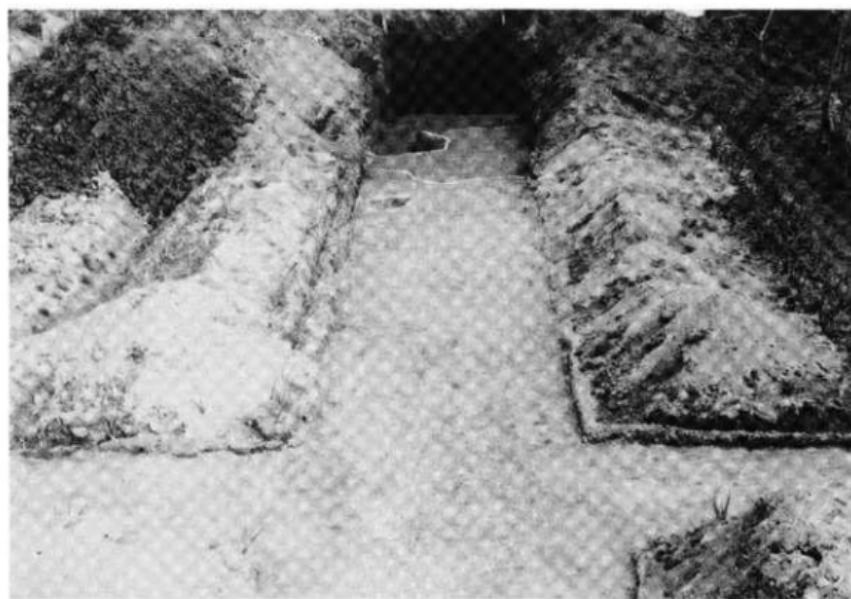
第3トレンチ北より



第3トレンチ(後方)・第6トレンチ(手前)南より



東より



西より・手前は第6トレンチ



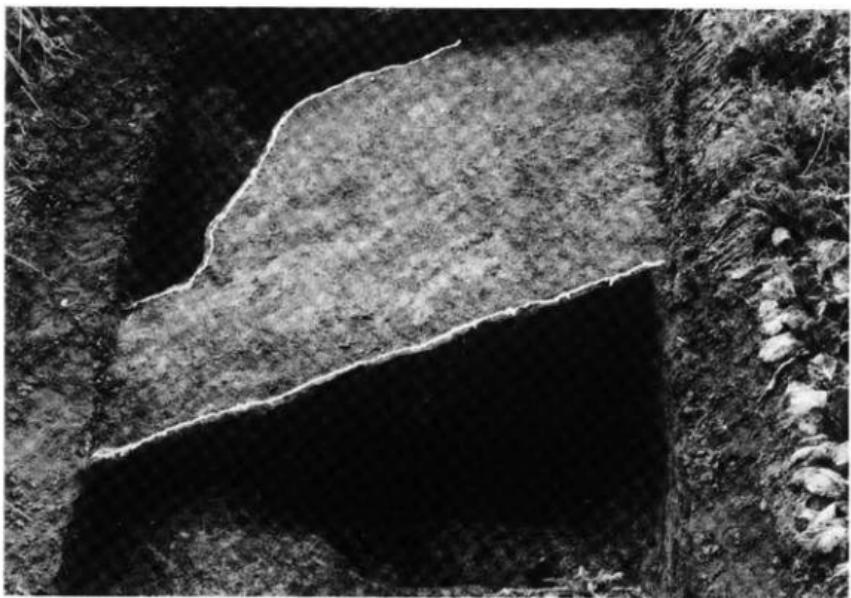
北より



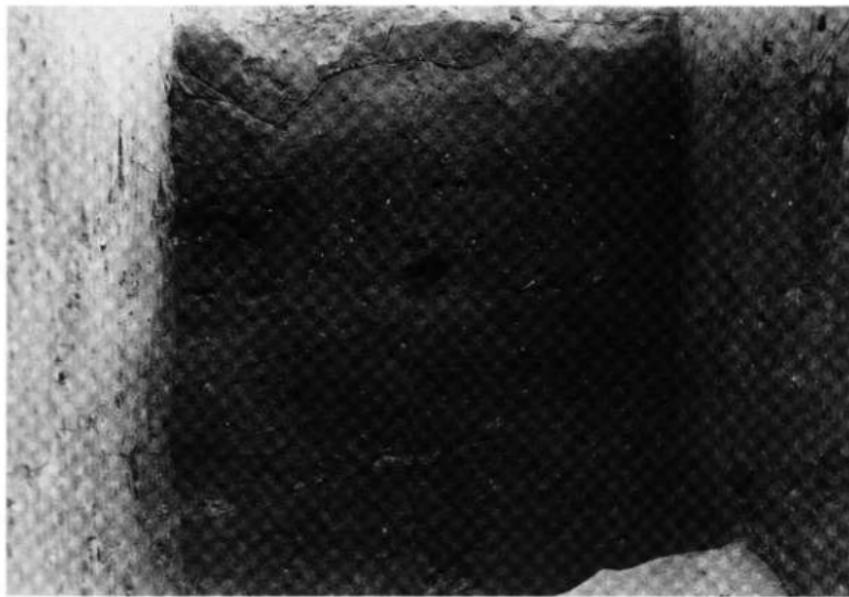
南より・手前は第4トレンチ



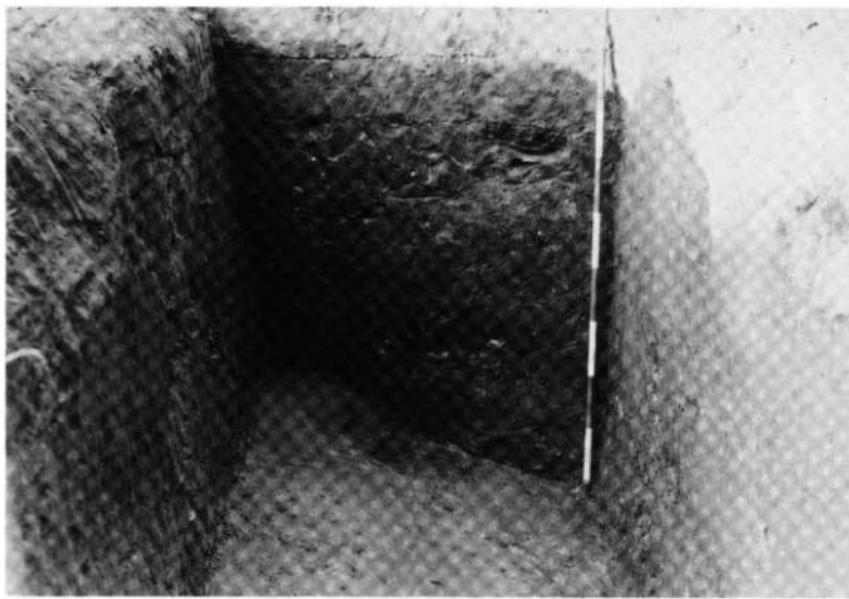
第6トレンチ北より



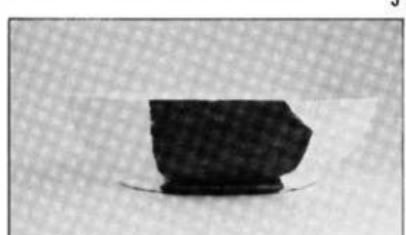
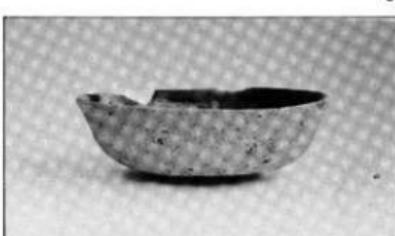
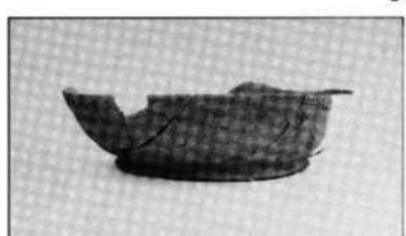
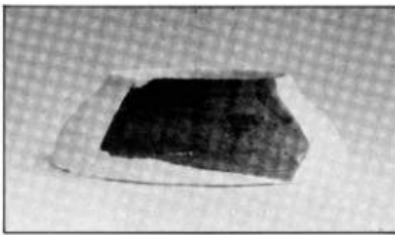
第7トレンチ西より

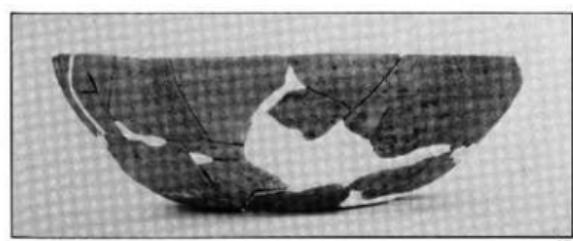
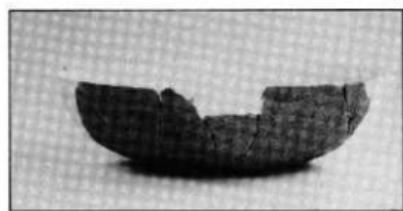
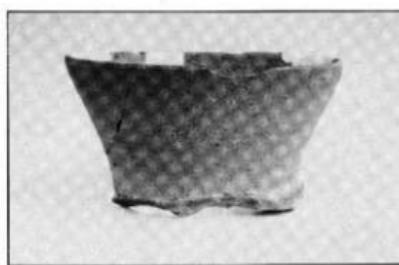
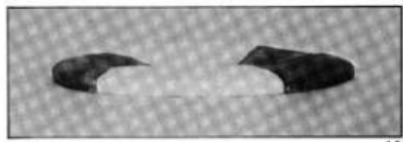


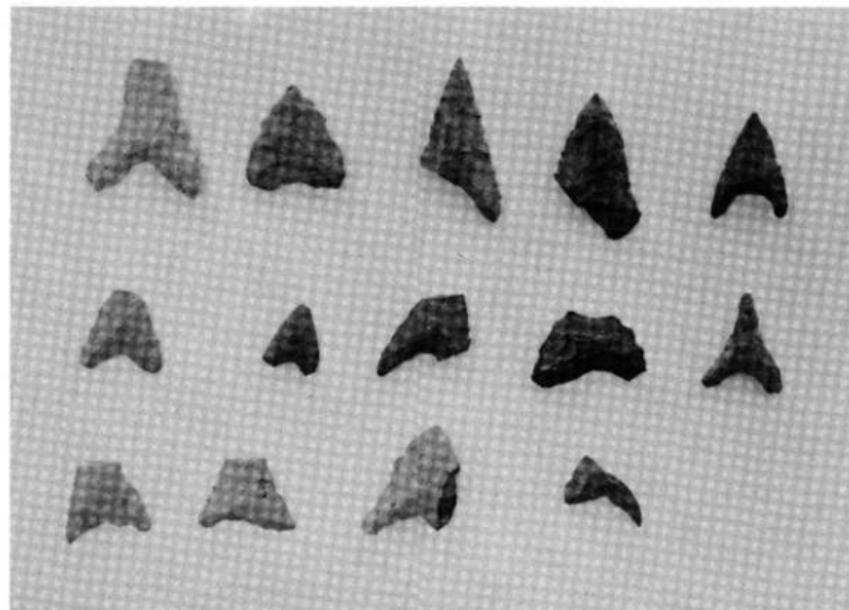
第2トレンチ北断面



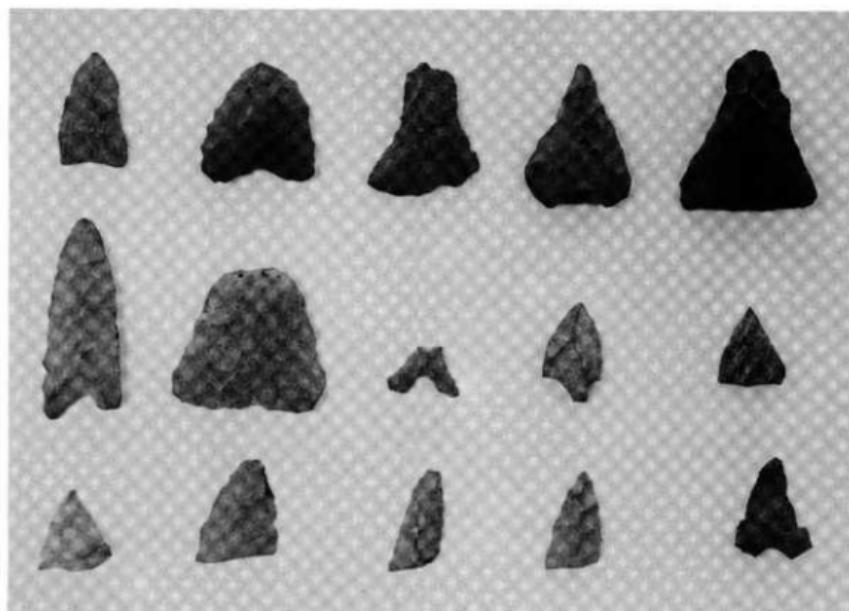
第5トレンチ南断面



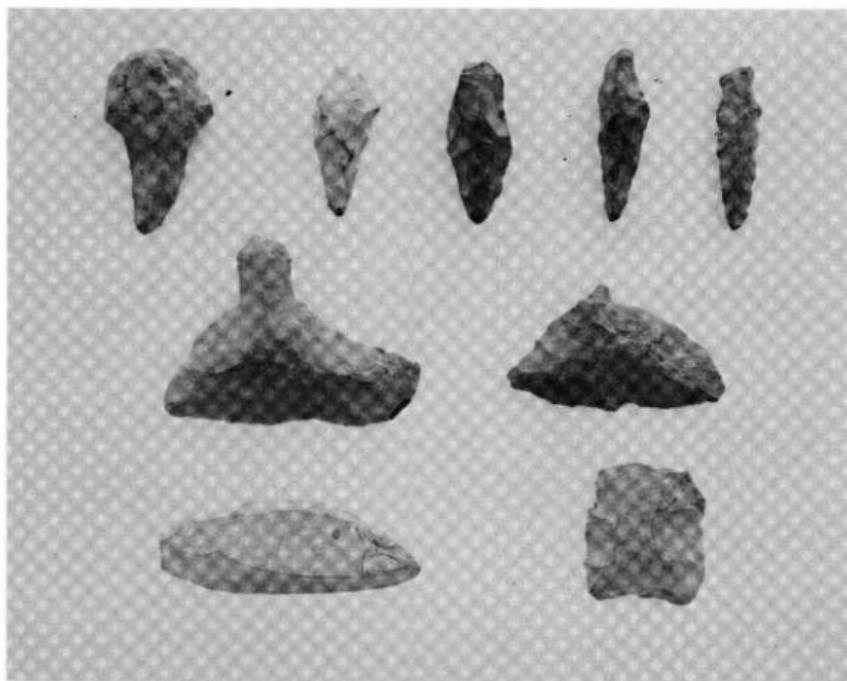




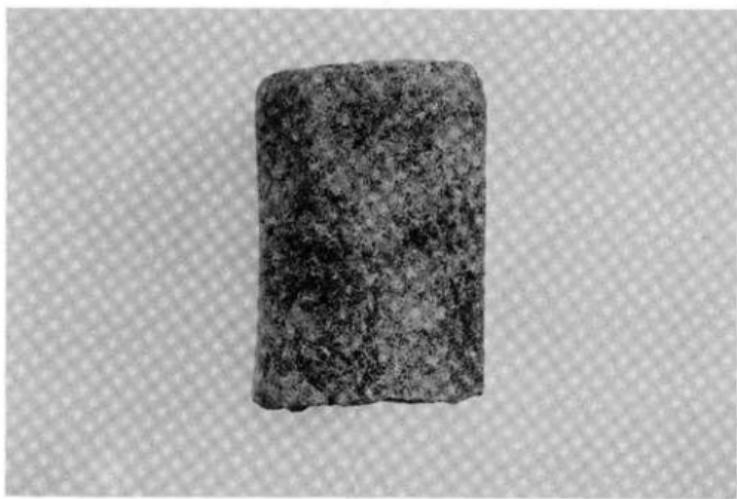
1



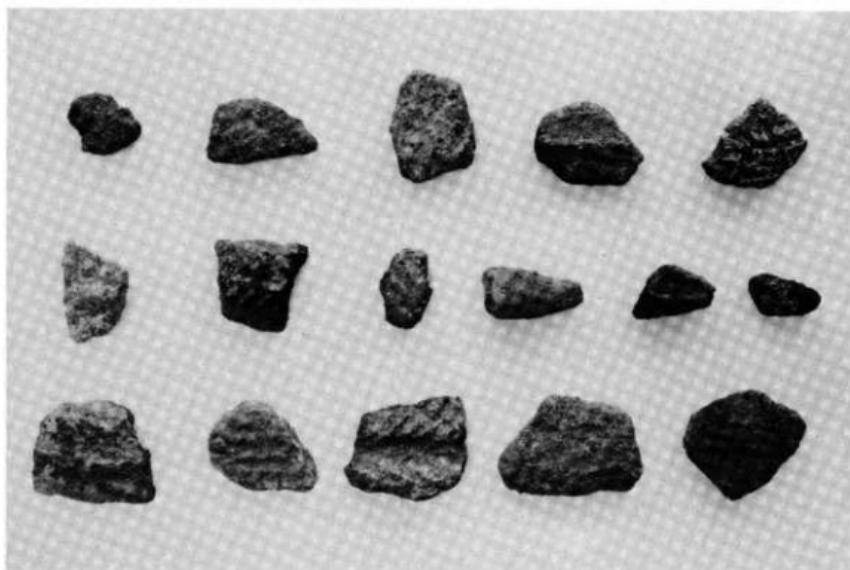
2



1



2



1



2

高宮廃寺発掘調査概要報告IV

昭和58年3月 発行

編集 寝屋川市教育委員会

発行 寝屋川市教育委員会
大阪府寝屋川市本町1番1号

